

ドイツさんが残した大きな足跡



終戦の放送に聞き入るラジオ前の人ばかり（以下、写真は全て久留米市教育委員会所蔵）

・別れのと看

「(久留米駅で) 乗車して、荷物を置いて、それから残留者と談笑するためまた降りた。さあ、今度こそお別れだ。言葉を言うのも難しく、涙が溢れる者もいた。喜びで気が狂うに違いないと5年間信じてきたその出発の瞬間が来たのに、それは思ったよりずっと深刻なものであった。別れを告げなくてよいと思っても、だめだった。多くの苦しみを受けた土地にさえ、心の一部が残るものなのである。」

(「エルンスト・クルーゲの日記」生熊文抄訳)

大正8年(1919)6月28日、ベルサイユ講和条約が連合国とドイツとの間で調印されました。これにより戦争が終了し、解放を目前にした10月には盛大なスポーツ大会を開催。12月には久留米高等女学校で「第九」を中心とする演奏会や恵比須座での独逸人演芸会も催されるなど、市民との交流が急速に深まっていったのはこの時期でした。

その後まもなく捕虜たちは段階的に解放され、久留米を離れていきます。まず12月19日に34名、同26日に98名、そして31日には最大の812名、翌年1月26日には、残る最後の捕虜118名が帰郷の途につきました。残務整理が終わった3月12日をもって、5年



帰国のため荷物を積みだす。お土産には「名産品」絹製のブラウスや布地を買い込んだ捕虜も

3ヶ月にわたった久留米俘虜収容所の幕が閉じられました。同時に「久留米の戦争」も終わったのです。帰国の途につく捕虜たちへ、第十八師団長代理が別れの言葉を贈りました。

「世界大戦は五年以上も続き、ようやく終わりました。皆さんも帰郷なさるわけで、私も非常に感激し大きな喜びを感じています。日本には次のような諺があります。『雨降って、地固まる』。日本はドイツと戦争をしました。昨日の敵は今日の友であります。今より世界を発展させるためには、ドイツと日本はともに歩まなければなりません。最後に皆さんに申し上げたいことは、日本の軍と国民の代表として、勇敢なるドイツの軍と国民に将来の発展をお祈りするということです。」（「フィッシャー回想録」生熊文訳）

・捕虜の消費支出

ドイツ兵捕虜の収容所が設置された久留米では、その収入と消費支出によって地域経済が絶大な恩恵を受けたことを忘れてはならないでしょう。ハーグ条約の規定に基づき、捕虜将校には日本政府から俸給が支給されていました。捕虜の親族や友人たち、かつて勤務していた会社からの送金もありました。俸給がない下士卒についても、本国からの救恤金、救護会からの寄付金が配分され、所外労働での賃金を得る者もいました。

その消費額は大変な金額です。例えば大正5年（1916）における久留米市の予算額は約218,000円（約6億円）（注1）でしたが、同年の久留米収容所内の酒保（売店）の売上高は約228,000円（約6億2,700万円）で、市の年間予算を上回る額。物品の売上げは、1位ビール、2位タバコで、外に飲食物、雑貨、洋食、果物が続きます。他に、被服糧食費、



酒保でビールを囲み記念撮影

賄料などがあります。これらとは別に、下士卒の衣食住は日本政府が賄っており、この費用も久留米に落ちることになります。

「出入り商人は約四十名で、将校食料同酒保及び准士官以下の食料品の商人が儲頭である。洗濯屋でも毎月三百円に上り、靴屋が百五十円乃至二百円、床屋が七、八十円乃至百円にも及んであるので、此等の連中は矢張り俘虜様々であらう」

(「福岡日日新聞」大正4年12月6日付記事)

このような経済的な恩恵が背景にあり、久留米市民は「ドイツさん」という親しみを込めた愛称で呼ぶようになったのかもしれませんが。

・近代の久留米、商工都市への飛躍

第一次世界大戦が始まると、交戦中のヨーロッパ市場への輸出に加え、ヨーロッパからの輸入が激減した東南アジア・アフリカ市場への輸出が増えます。日本の産業界は未曾有の好景気を迎えました。我が国はようやく国際的な工業国への仲間入りを果たしたと言えるでしょう。久留米の産業界も日本足袋やつちやたびなどの綿糸関連工業を中心に、堅実に地歩を固めていきます。明治22年(1889)の市制施行時に24,750人だった人口も、ドイツ兵捕虜が解放された大正9年(1920)には、43,629人と約1.8倍に増加し、軍都として発展の道を歩んでいました。

しかし、第一次世界大戦が終結したことにより、増大した産業による過剰生産物が大量発生、株価も3分の1まで大暴落する戦後恐慌に見舞われました。国内の多くの工場、銀行、商店が倒産する中、久留米の商工業界もまた、この波を逃れることはできませんでした。それでも久留米の被害は比較的少なかったといわれます。好景気の中でも派手な事業拡大や投機的な事業が少なく、時には消極的と評されるほどの堅実さでした。半面、その経営方針は、師団やドイツ兵捕虜収容所の消費支出、更には戦争好景気による貯えを温存し、恐慌の嵐を乗り切る基盤となりました。

不況下にもかかわらず久留米の産業を力強く牽引したのは、綿糸関連工業でした。なかでもつちやたびでは、ドイツ兵捕虜を雇用して、ゴム靴底成形機械の改良を施し、ゴム底を貼り付けた地下足袋とゴム靴の製造を開始しました。日本足袋もほぼ同時に同種の商品を製造開始。大正12年(1923)以降は、地下足袋を主軸とした近代的なゴム産業へと脱皮していきます。両社は互いに競い合い、生産高は飛躍的に拡大していきました。

その後、久留米のゴム産業に参入したのがブリッチストーンタイヤ株式会社です。日本足袋株式会社のタイヤ部を母体として昭和6年(1931)に設立。社長には同社の二代目社長



収容所の中央広場でのし物待つドイツさん

である石橋正二郎自身が就任しました。この時、日本足袋から転属した従業員 20 名の中にドイツ人捕虜がいました。そこでタイヤのゴム配合や「ブリッチストーン」というタイヤのブランド名の決定にかかわったことは、前回お話ししました。その後、一代で築き上げた世界企業への発展は、ドイツ人捕虜の雇用と、次のような経営理念によるものでしょう。

「ゴム工業者の使命として、履物だけに甘んずることなく、タイヤ企業に進出し完全国産化をはかり、タイヤ輸入を防止するとともに更に進んで海外にまで輸出して、原料のゴム輸入代価を相殺し、わが国の国際収支に貢献しよう」（日本ゴム株式会社「40年の歩み」）

これまでお話ししたように、「ドイツさん」達は、軍都として発展の道を歩み始めた本市に、近代ヨーロッパの文化やスポーツを紹介しただけではなく、市の予算額を超える消費支出によって経済を潤し、ゴム産業を中心とする新たな技術革新に多大な貢献をしました。その後のゴム産業を基幹とする商工都市への発展は、百年前の久留米にやってきたドイツ兵捕虜たちの存在を抜きにしては語れないのです。

（注1）白米価格を元に換算すると、当時 10 kg = 1 円 20 銭で、現在の米価が 3,300 円とすると、当時の 1 円は 2,750 円となる。